

鑑賞の能力を引き出し高める授業づくり

— 主体的に音楽にかかわろうとする子どもの育成を目指して —

佐藤 若菜¹

生活の中には音楽があふれている。しかし意識して聴く場面は意外に少ない。そこで本研究では、鑑賞指導の現状と学習指導要領の改訂内容を踏まえ、「鑑賞の能力」に焦点を当てた。児童の知的好奇心を刺激しながら、ねらいを明確にした鑑賞指導を積み重ねることで、それまで意識していなかった生活の中の音楽に興味を持って耳を傾けたり、鑑賞で感じ取ったことを表現活動に生かそうとしたりする主体的な姿を見ることができた。

はじめに

子どもたちは日常生活の中で、校内放送、テレビ、携帯電話の着信音、店のBGMなど、無意識のうちに実に多様な音楽に触れている。

中央教育審議会答申（2008）においても、改善の基本方針の中で「音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくむことなどを重視する。」と述べられているように、本来授業での音楽は、生活の中の音楽とつながっていることが望ましい。中でも「音楽を聴くこと」は最も身近な音楽活動となってよいはずである。しかし、授業での鑑賞においては、漠然と聴かせて感想を求めるといったケースも見られ、内容的にも時間的にも十分な指導が行われているとは言えない。

そこで、鑑賞の充実が音楽の基礎的な能力を高めることに大きな役割を果たすと共に、児童一人ひとりのより豊かな音楽活動につながると考え、本研究に取り組んだ。

研究の内容

1 学習指導要領における鑑賞の位置付け

(1) 求められる鑑賞指導の充実

「音楽の感じ方は人それぞれだから、鑑賞に正解はないのではないか。」「主観的な行為であるはずの鑑賞をどう評価したらいいのか。」といった声をよく耳にする。これは、指導者が鑑賞指導の意味や内容を明確にとらえることができないまま授業を進めている場合に直面する悩みであると考えられる。

平成20年3月に告示された学習指導要領では、学年ごとの目標の中で、「基礎的な鑑賞の能力」を育て（1・2年）伸ばし（3・4年）高め（5・6年）という表記が加わった。指導内容も「味わうようにする」「気を付けて聴く」といった表記が「指導する」「理解する」

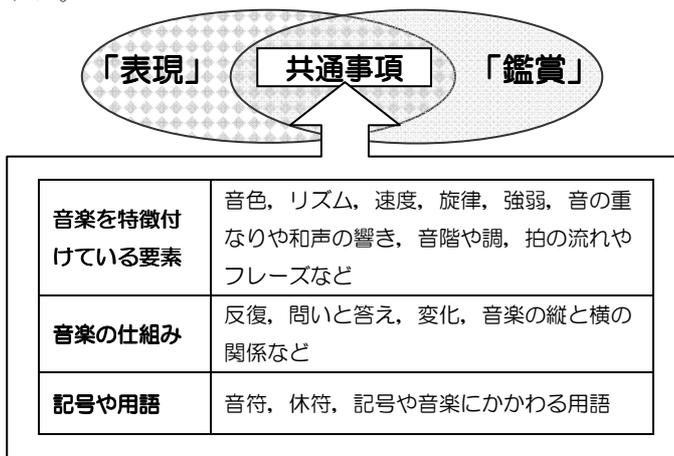
と改められ、6年間を通して系統的な指導をすることが強調されている。

こうして比較してみると、実際の指導内容は大きく変わるものではないが、課題とされてきた鑑賞指導の充実を意図した改訂内容であることは、はっきりと読み取ることができる。

(2) 表現領域との関連と共通事項

音楽科の指導内容は、第1図に示したように「表現」と「鑑賞」の2領域で示されている。これらは独立して行われるのではなく、互いにかかわり合いながら「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」という音楽科の目標に迫ることが望ましいとされている。そのためには、音楽の授業全体を通して子どもたちに何を身に付けさせたいのかを、指導者が常に意識していなければならない。

今回の学習指導要領の改訂では「鑑賞」と「表現」で別々に示されていた指導事項に加え、両領域を通して指導する内容として共通事項（第1図）が新たに示された。



第1図 学習指導要領（平成20年3月）で示された共通事項（5・6年）

1 厚木市立鷹尾小学校
研究分野（音楽）

本研究では、この共通事項を踏まえ、表現領域との関連を意識した鑑賞指導について追究した。

2 研究仮説

教科書では、「ひびきを味わいながらききましょう。」や、「曲想を味わいながらききましょう。」というような活動文が示されている。しかし、鑑賞している様子を観察していても味わっているかどうかは判断しきれず、一人ひとりを見取るのは難しい。そのため、味わうことのみを授業のねらいとして位置付けてしまうと、「音楽の感じ方は人によって違うのに、何を指導すべきなのか。」という疑問は解消されないと考えられる。「小学校学習指導要領解説音楽編」(2008)では、「『基礎的な鑑賞の能力』とは、音楽を聴いて、音楽を形づくっている要素のかかわり合いや、それによって醸し出される楽曲の気分を感じ取る能力のことである。」と定義されている。つまり鑑賞活動では、味わうことが最終的なねらいであっても、「音楽を形づくっている要素」を知り、「それらの要素のかかわり合い」に気付いた上で「かかわり合いによって醸し出される楽曲の気分を感じ取る」という段階が必要であると言える。「音楽を形づくっている要素やそのかかわり合い」は感じ方や味わい方のように人によって違うものではなく、誰もが共感し共有できる事項であるため、指導によって理解を深めることが可能である。

漠然と「きれいな曲」「激しい曲」などと感じていたことが、音楽を形づくっている様々な要素のかかわり合いによるものであるという理解に結びついてこそ、充実した鑑賞活動と言えるのではないだろうか。そしてそのような活動が、子どもたちの知的好奇心をくすぐるような教材や仕掛けと共に行われれば、実感を伴った音楽理解につながり、自己の表現活動にも活かされるに違いない。

以上のような考えをもとに次のような研究仮説を立てた。

指導のねらいと、そのための手立てを明確にした鑑賞活動の積み重ねが、児童の音楽活動への興味・関心を高めると共に、鑑賞の能力を引き出し高めることへとつながるであろう。

3 検証授業

(1) 検証授業の概要

鑑賞の能力の高まりを短期間で見取るのは難しいと考え、平成20年6月～平成20年11月までの約半年にわたり、5年生2クラス(45名)を対象に10時間の実践を行った(第1表)。

第1表 各時間のテーマと主な指導事項

時	「テーマ」 《主な活動内容》(主な指導事項)	主な教材
1	「どの楽器の音かな?『ボレロ』大研究Ⅰ」 《鑑賞》(音色)	「ボレロ」(ラヴェル)

2	「リズムの仕組みを探る～『ボレロ』大研究Ⅱ～」 《鑑賞》(リズム)	「ボレロ」(ラヴェル)
3	「イメージを持って音楽を味わおう」 《鑑賞》(曲想 音色)	「動物の謝肉祭」より「亀」「象」「雄鳥と雌鳥」「白鳥」(サン＝サーンス)
4	「旋律にかくされたひみつ①～『亀』～」 《鑑賞》(旋律 速度)	「亀」(サン＝サーンス) 「天国と地獄序曲」(オッフェンバック)
5	「旋律にかくされたひみつ②～『ファランドンール』大研究Ⅰ～」 《鑑賞》(旋律 構造)	「アルルの女」より「ファランドンール」(ビゼー)
6	「響きの違いを感じ取ろう①」 《鑑賞》(音階や調)	短調・長調の様々な曲
7	「響きの違いを生かした表現を考えよう」 《歌唱》(音階や調 曲想)	「小さな木の実」 「夢の世界を」
8	「響きの違いを生かした表現を工夫して発表しよう」 《歌唱》(音階や調 曲想)	「小さな木の実」 「夢の世界を」
9	「響きの違いを感じ取ろう②『ファランドンール』大研究Ⅱ」 《鑑賞》(音階や調 旋律 変化)	「アルルの女」より「ファランドンール」
10	「音楽をつくろう～長調や短調の響きを生かして～」 《創作》(音階や調 リズム 音符)	ハ長調の音階 イ短調の音階

第1時から第6時、第9時は鑑賞活動としての流れを、第6時から第10時は表現領域との関連を図りながら一つの題材としての流れを重視した。

(2) 授業の工夫

ア 教材選択の工夫

教材は、第2表に示す①～③の3つの観点で踏まえて選択した。

第2表 教材選択の観点と期待される効果

①生活とかかわりの深い音楽	校内放送で流れている曲や、テレビのCMに使われている曲などの身近な曲。	学習後も繰り返し耳にする機会がある。
②音楽的要素が聴き取りやすい音楽	強弱、速度の変化、音色などの特徴が捉えやすい曲や演奏。	誰もが同じ要素(変化や違いなど)を感じ取ることができる。
③既習事項とかかわり	表現及び鑑賞での既習内容を踏まえた指導のできる教材。	より深い音楽の理解と指導事項の定着を図る。

イ 授業の組立

① 同じ教材で異なる視点を与える。



同じ曲でも聴き方を変えるといろいろな発見があるということに気付かせたい。

<第1時・第2時>

「ボレロ」を教材とし、第1時は旋律を演奏する楽器の音色の違い、第2時はスネアドラムの刻むリズムの仕組みをテーマとした。

＜第3時・第4時＞

第3時は「動物の謝肉祭」から音楽的な特徴をとらえやすいと思われる4曲を取り上げ、どの動物を連想したか、また、なぜそう考えたのかを話し合った。第4時はその中から「亀」の旋律に着目し、「天国と地獄」と聴き比べ、同じ旋律が使われているという気づきを基に授業を進めた。

＜第5時・第9時＞

「ファランドール」を教材とし、第5時は「王の行進」「馬のダンス」の二つの旋律に着目しながら曲の構造を探った。第9時は、第6時から第8時の学習内容である「調性」を視点に加え、曲想の変化を中心に聴き取った。

② 時期を工夫する。
↓
教材を扱う時期を工夫することで、意識して聴きかけをつくる。

＜第1時＞ 「ボレロ」(6月)

- ・所属校の清掃時のBGMであり、早い時期に扱うことで意識的に聴く機会が増える。
- ・この時期、多くのCMで使われていたため、生活の中でも耳にする機会が多いと考えられる。

＜第4時＞ 「天国と地獄」序曲より(9月)

- ・運動会の前日に取り上げ、翌日の徒競走のBGMに意識を向けるきっかけをつくる。

ウ 表現領域との関連

小学校5・6年生の音楽の授業時数は年間50時間である。この中でより効果的な指導を行うには、今回は歌唱、次回は器楽、という授業の進め方ではなく、1時間の中に無理なく様々な活動を取り入れて継続的かつ横断的な指導をしていくことが大切と考えた。同じ45分の指導でも、1回で行うのが良い場合と、5分の指導を9回に分けて行う方が成果が上がる場合とがある。そのため、学習の柱になる活動と、それに関連させながら継続的に行う活動とを45分の中に組み込むことにした(第3表)。

第3表 1時間(45分)の流れの例(第9時)

●学習内容	・学習活動	前後の時間とのかかわり
〈今日の一曲 「アルルの女」より「メヌエット」〉		継続的な活動
●響きや音色を工夫して演奏しよう。		継続的な活動 継続的な活動 (第8時の活動に関連)
・顔の体操	・発声練習	
	・既習曲を歌う。	
	・リコーダーリレー	継続的・横断的な活動 (第10時の活動に関連)
●「ファランドール」大研究Ⅱ		本時の柱となる活動

・大研究Ⅰの内容を振り返る。	(第5時の活動に関連)
・「王の行進」「馬のダンス」、それぞれの旋律が変化していく様子を意識して聴く。	(第1～8時の学習内容を踏まえて)
・気付いたことを話し合う。	
・気付いたことを発表する。	(第6～8時の学習内容「短調・長調」に関連)
・友だちの気づきもふまえて、もう一度確認しながらじっくり聴く。	
・「王」「馬」、それぞれのカードを使い、音楽の変化に合わせて動かす。	

また、多方向から同じ音楽的要素に着目することでより深い理解ができると考え、第6時から第10時では「曲想を感じ取ろうー短調の響き・長調の響き」という一つの題材に対し、表現と鑑賞それぞれの視点から迫るという取組を行った(第4表)。

第4表 題材構成(第6時～第10時)

題材名 「曲想を感じ取ろうー短調の響き・長調の響きー」	
表現	鑑賞
第7時 「響きの違いを生かした表現を考えよう」(歌唱) 第8時 「響きの違いを生かした表現を工夫して発表しよう」(歌唱) 第10時 「音楽をつくろう～長調や短調の響きを生かして～」(創作)	第6時 「響きの違いを感じ取ろう①」 第9時 「響きの違いを感じ取ろう②」 『ファランドール』大研究Ⅱ

(3) 児童の変容

ア 聴き方の変化

6月に行った第1回目の検証授業の最初に、何も観点を示さずに、「ボレロ」を聴いて気付いたことを書くという活動を行った。清掃時のBGMで、ほぼ毎日無意識に聴いているということもあり、「聴くこと」に対する抵抗はなく、指揮をしたり、体を動かしたりしながら思い思いに聴いていた。

しかし、書く活動となるとかなり個人差が見られた。「太鼓がずっとなっている。」「だんだん盛り上がる。」など、音楽的な要素を聴き取っていると思われる記述もいくつかあったが、「いい曲」「掃除の曲」など、漠然とした記述にとどまる児童も少なくはなかった。気付いたことと言われても、何を書いていいのかわからない児童も多かったようだ。

2学期に入ってから「旋律」「速度」「構造」などをテーマにした活動を行ったが、回を重ねるごとに気づきの幅が広がり、前時の学習をふまえた記述や発言

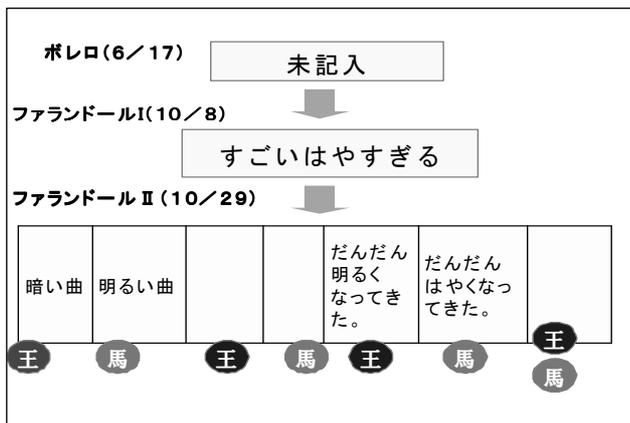
が増えた。誰よりも早くひみつを見付けようと、競うようにして聴いていることもあった。授業の振り返りにも、「また一步音楽が進んだ。」「最後にびっくり体験をして楽しかった。」「奥が深かった。」「もうちょっとやりたい。」などと記されており、自分の聴き方が変わってきていることへの気づきが、さらなる知的好奇心へとつながってきているようだった。

イ 記述の変化

第9時に、第5時の教材「ファランドール」を再度取り上げた。ワークシートの形式を曲の流れに添ったものにし、聴きながら気付いたことをメモするという活動を行ったところ、曲が流れている3分半ほどの間、ほとんどの児童が鉛筆を動かして続いていた。第1時の「ボレロ」では未記入だったり、「いい曲だった」の一言で終わっていたりした児童も集中して黙々とメモを取っていた。

第1時に、「水戸黄門みたいな音がする。」「だんだん音が大きくなっていく。」「繰り返し」などと「リズム」「強弱」「反復」などの変化を聴き取り、記していた児童は、第9時には気づきや感じ方の幅が広がり、第6時から第8時の学習内容を反映させて、調性の変化に気付いたり、旋律以外の楽器の音色の変化をとらえたり、とさらに深い聴き方をしていた。それらの気づきをクラスで共有し、みんなで確認することによって、初めはなかなか書くことができなかった児童の記述にも変化が現れてきた。

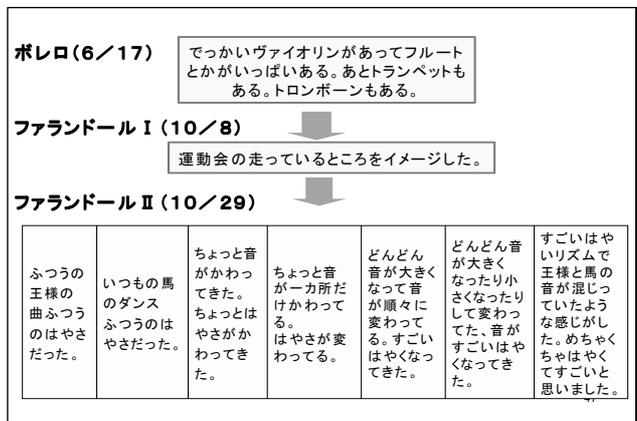
第1時にはなかなか気付いたことを書くことができなかった3名の児童を抽出し、記述の変化を図にした。



第2図 記述の変化(児童A)

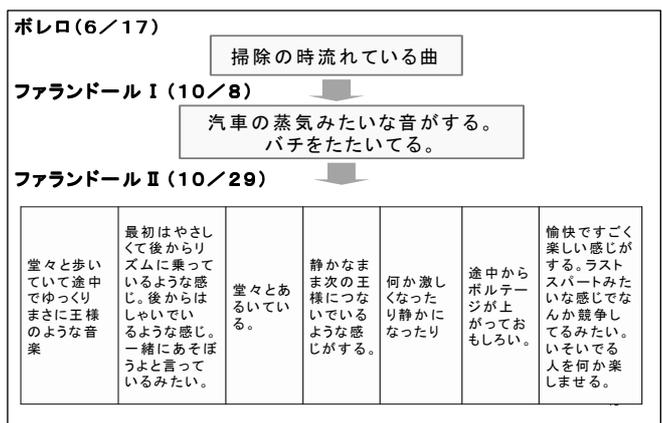
児童Aは、活動内容を理解するのに時間がかかり、他教科でも側について助言しないや何も書かずに提出することが少なくない。演奏時間が15分もある「ボレロ」を聴いても一文字も気付いたことを書くことができなかった。ファランドールIの「すごいはやすぎる。」という記述は、振り返りの「音楽がうまくききとれなかった。」という言葉から察すると、「早すぎてよくわからないまま終わってしまった。」ということだと読み

取れる。しかし、ファランドールIIでは、短調の「王の行進」の部分に「暗い曲」、長調の馬のダンスの部分に「明るい曲」などの記述をしていることから、響きの変化を、また、「だんだん・・・」という言葉から曲想の変化を聴き取っていることが分かる(第2図)。



第3図 記述の変化(児童B)

児童Bも書くことが得意ではなく、「ボレロ」では「何を書けばいいかわかんない。」と、ワークシート上の図を見ながら楽器名を並べていた。ファランドールIでも「何書くの?」と悩んでいたが、「どんな場面をイメージしたかということでもいいよ。」と言うとようやく一行書くことができた。しかし第9時は、いつもなかなか書き始めることのできないこの児童が「ファランドール」の3分半ほどの間によくこれだけ書いたと感心するほどのスピードでメモし続けた。速度と強弱の変化を中心に聴いている(第3図)。



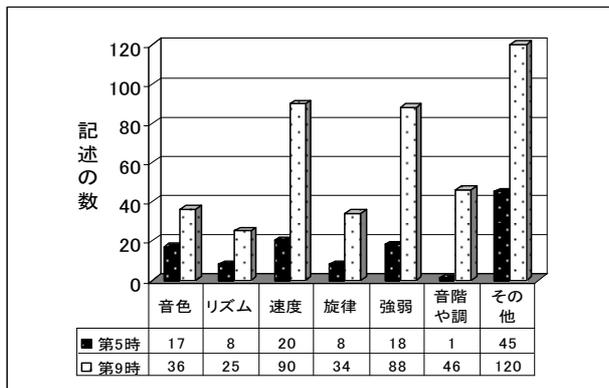
第4図 記述の変化(児童C)

児童Cは最初の「ボレロ」では「掃除の時流れている曲」と書いただけだった。しかし、作曲家の名前にとっても興味があり一度出てきた作曲家は、教えなくても次の時間にはフルネームを覚えてきていた。黒板の端にBGMとして流した曲名を書いておくと、「カルメン前奏曲ってことは、後奏曲もあるの?」など、その時間の内容にとどまらず、授業後にもよく質問に来る

ようになった。ファランドールⅡでは、感じ取ったことからそれぞれの場面を想像して自分なりの世界観を持って書いている（第4図）。

ウ ワークシートの工夫と記述量の変化

第5図は、第5時と第9時の児童の記述を分析し、グラフにまとめたものである。項目にあてはめきれない記述も多数あったが、分類できる範囲で、これまでに授業で扱った要素を中心に、第5時と第9時を比較した。



第5図 第5時と第9時の記述内容の比較

第5時と第9時では、ワークシートの枠を大きく変えた。第5時は、一つの大きな枠に書き込む形だったため、「ディズニールランドみたい。」「天国と地獄に似ている。」「大きくなったり小さくなったり」「はやくなったりおそくなったり」といった全曲を通した表記になってしまい、曲の構造や曲想の変化をどの程度聴き取っているのかを見取るのは難しかった。第9時は、第5時の学習内容を踏まえ、曲の流れに合わせた枠にした。これにより曲のどの部分でどのような変化がおこっているのか、それによってどんな感じがしたのか、ということを整理して聴くことができるようになり、記述の量は大幅に増えた。また、音楽のどの要素を聴き取った記述であるのかも見取りやすくなった。図に示した要素以外の音楽的要素や、音楽から受けたイメージなどを含む「その他」が大幅に増加しているのも、ワークシートの枠の違いによるところが大きいと考えられる。

第5時の学習で、自分たちで曲の構造に気付き、驚いたという体験をした次の段階として、この第9時のワークシートは効果的であった。段階を踏んだことがより深い聴き取りへとつながったのではないだろうか。

エ 気付きの内容

第6時から第8時では「短調と長調」の学習をした。短調と長調それぞれの響きのイメージを話し合った後、これまで学習経験の少ない短調の曲を教材としてグループごとに表現の仕方を工夫した。これらの活動を通して響きの違いをとらえられるようになっていれば、第5時にはほとんどの児童が知らなかった「調性」と

いう視点が第9時には加わっているはずである。第5図からも分かるように、第5時にはわずかに一つだった短調と長調の響きの違いを聴き取ったと思われる記述が、第9時には46にのぼった。自分では気付かなかった児童も、気づきを共有することで驚きと共に理解を深めることができたようである。

オ 学習活動の工夫と振り返りの内容

授業の振り返りの内容や記述量は、活動によってかなり差があった。その中で最も自分の思いが強く表れていたのは、第8時、第9時だった。第8時は、前時に引き続き「小さな木の実」の響きを生かした歌い方の工夫をグループで話し合い、発表するという活動、第9時は前述の通り、「ファランドール大研究Ⅱ」を行った。両方の時間に共通しているのは、音楽を聴き、友だち同士話し合い、気付いたことを共有するという受信と発信が組み合わせられた活動だったということである。

<第8時>

- ・ 他のグループのをみるとよく考えてることが伝わってきました。
- ・ みんなで歌ったとき声がかっこよくなり、長調の所がすごくきれいに歌えた。
- ・ ていねいな声で歌っていたと言われて嬉しかったです。すこし地声になってしまったのが反省点です。

<第9時>

- ・ みんなの意見と自分の意見がいつちしてすごくおもしろかった。自分は王の行進の方が好き。
- ・ 短調と長調があるなんておどろいた。知るとなんだか音楽がおもしろくなってきた。ファランドール以外にも秘密が知りたい。
- ・ 前は全部くもりの研究だったけど、今回は分解して考えたのでいろいろなことが分かりました。イメージ的に王様VS馬みたいな感じに張り合っている気がしました。でも、そう考えると結局どっちが勝ったのかな？と考えたりできるのでとても楽しいです。
- ・ またファランドールを調べてみて最初調べた時と今日調べたときの違いが分かりました。知れば知るほどおもしろいですね。

個人活動の中で自分が気付いたり、新しいことを知ったりした場合も、それなりの喜びや驚きが記されていたが、友だちとのかかわりの中で受信と発信を繰り返しながらお互いに高まっていくのを実感した時には、鑑賞活動でも表現活動でも、より大きな達成感や満足感を得ている児童の多いことが分かった。

(4) 主体的なかかわり

ア 授業の中から

授業では、初めから分析的な面ばかりを追求してしまうと、主体的な音楽活動にはつながりにくいと見え、

可能な限り自分たちで発見したという感覚を持てるよう流れを工夫した。曲に隠されたひみつを発見したり、作曲家の気持ちになって吹き出しにコメントを書いたり、といった鑑賞活動を積み重ねるうちに、「ひみつがわかった。」「勉強になった。」といった感想から「自分も曲を作りたい。」「ビゼーさんみたいに自分たちも曲に工夫できると思う。」「今度は長調か短調か考えて歌いたい。」などの記述や発言へと変化していった。表現活動で学習したことを踏まえて、鑑賞する曲の特徴をとらえようとする児童も増えてきた。鑑賞活動を自分の音楽活動につなげて考え始めたのである。

イ 追跡調査から

この10時間の実践から1ヶ月ほどたった12月に、追跡調査を行った。この学習をしてから自分がやってきたことや意識したことについて問うと、

- ・ ラジオで人の話の裏で「王の行進」が流れていた。
- ・ CMで流れていた曲を、耳をすまして聴いていた。
- ・ 掃除の時にいつも意識して聴いている。
- ・ 家にCDがあったので聴いてみた。
- ・ リコーダーを吹くときに短調か長調か考えている。
- ・ 「天国と地獄」と「亀」の事をお母さんに教えた。
- ・ カラオケに行ったとき短調か長調か考えて歌った。
- ・ お店やテレビで同じ曲が流れて「あ！」と思った。
- ・ お風呂で、鑑賞でやった曲を歌っている。
- ・ ゲームで「ボレロ」をよくやっている。
- ・ 家の人にまた新しい曲を教えてもらった。

など、9割以上の児童が授業での鑑賞活動を表現活動や生活に関連付けていることがわかった。中でも「家の人や友だちに教えた」「家族で話した」など、鑑賞の学習で得た知識を誰かに伝えたという内容の記述は特に多く、児童全体の3分の1にものぼった。

この追跡調査から、鑑賞活動の充実が生活の中の音楽への気付きや児童一人ひとりの主体的な音楽活動に様々な形で生かされていることが分かった。

4 まとめと課題

鑑賞活動を積み重ねるうちに、子どもたちは自然に前の時間に扱った教材や事項を踏まえて聴いたり演奏したりするようになり、回を追うごとに記述の内容が充実していった。また、日常生活や遊びの中の音楽に意識を向け始めている児童が多いことも追跡調査から明らかになった。鑑賞活動の充実により、児童の鑑賞の能力が高まり、新たな興味・関心へとつながったと言える。

しかし、本研究での検証授業は鑑賞指導の充実に向けた第一歩にすぎない。さらなる可能性を見出すためには、限られた授業時数の中で鑑賞の時間を確保し継続していく必要がある。本研究では第5学年の児童を対象として実践を行い、様々な視点から児童の変容

を見取ることができたが、高学年になってから鑑賞の充実を図ったのでは、時間的にも内容的にも指導の限界がある。音楽の授業時数が比較的多い低学年の時期から、指導者が題材のねらいや教材の特徴を意識し、楽しいだけで終わらない、その後の音楽活動につながる鑑賞活動を行っていくことが大切なのではないだろうか。

言語活動の視点からも、長期的な課題が見えてきた。言語活動の充実については新学習指導要領（H20年3月）の総則において規定されており、音楽科でも鑑賞活動の中に「感じ取ったことを言葉に表す」という内容が新たに加わっている。今回の実践でも、書く活動を意識的に取り入れたが、感じたことをどう言葉に表しているのか分からずとまどっていたり、「音が高い」「リズム」「音色」などの用語を間違った意味で使っているために、実際に感じ取ったことと表記内容とがずれてしまっていたりすることがあった。

充実した鑑賞活動を行うには、低学年から、「指導のねらい」「表現活動との関連」「言語活動の充実」を意識した系統的な指導が必要であることを強く感じた。

おわりに

- ・ 意外に学校で習った曲は身近にあった。
- ・ 何故音楽を聞くと、楽しくなったり、おもしろくなったり、泣けたりしてくるのがよく分かってきて、ぜんぜん表現できない曲だったのが表現できるようになりました。

これは、検証授業を終えての児童の感想である。研究を始めるにあたって目指していた児童像が、少しずつではあるが確実に形になってきているのを実感した。

本研究は5年生のわずか10時間の実践を通してのものであるが、子どもたちの変容とともに、自分自身の音楽の授業観も大きく変わった。鑑賞指導はおもしろい。

今後は、小学校6年間の系統性を考えた指導の在り方を追究していきたい。

引用文献

- 文部科学省 2008『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 p.21
- 中央教育審議会 2008「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（1月17日答申）

参考文献

- 渡邊學而 2004『子どもの可能性を引き出す音楽鑑賞の指導法』（財）音楽鑑賞教育振興会
- 川池 聡 2003『小学校・中学校新しい音楽科の指導と評価』教育芸術社